

フロンティア

あべ晋三後援会会報誌

FRONTIER



16号



信念を貫きます。

晋三

▼昨年九月、健康上の問題で内閣総理大臣を辞任しましたが、真相をお聞かせ下さい。
いま健康状態はどうですか。

私が健康問題によって総理を辞任したことで、皆様に多大なるご心配、ご迷惑をおかけしたことを改めて深くお詫び申し上げます。

私は潰瘍性大腸炎という持病を抱えていました。自民党幹事長、官房長官などの激務をこなし、克服したと自信を持つて、総理に就任しました。

しかし、昨年の夏、ウイルス性腸炎にかかり、持病の併発もあつて体調が悪化し、体力も限界点に達しました。何とか乗り切ろうと最後まで努力しましたが、結果として所信表明演説後の辞任表明となつてしまいました。国会で日中質問を受ける各党代表質問、予算委員会において重責を果すことはできない極めて苦しい状況でした。国民の生命・財産を守る最高指揮官として、その職責に耐えられないと判断せざるを得ませんでした。本当に断腸の思いで総理の職を辞す決断を下しました。病氣療養を理由に、総理の代理を置くことは法律上、許されていないのです。

その後、健康回復に専念し、お蔭様で万全な状態に回復致しました。持病の潰瘍性大腸炎に大きな効力を發揮する治療薬にも恵まれ、その不安も解消されました。

▼安倍内閣は一年間ではありましたが、戦後手をつけられなかった国の骨格をなす課題に挑戦され、大きな成果をあげられましたね。

確かに二年ではありましたが、私は「美しい国づくり」を掲げ、戦後レジームからの脱却実現に向け全力をあげて取り組みました。

特に教育は国家百年の計であり、教育改革に力を入れました。その結果、自民党政権の悲願であつた教育基本法の改正を六十年経て初めて実現しました。今年に入つて新しい教育基本法に基づいて学校現場の具体的な教育方針となる学習指導要領も書き改められました。

そのほか、防衛庁の省への昇格、公務員制度の改革、地方分権の推進、憲法改正のための国民投票法の成立など、困難な課題を成し遂げることができたと自負しています。

もちろん「美しい国づくり」は道半ばではありますが、その礎は築き上げることはできたと思います。今後も日本の輝かしい未来に向けて頑張り抜く決意です。

▼「政治家として原点に戻る。それは地元に戻り、地域の課題や皆様が抱えている問題を受け止め、そして将来への不安や夢に耳を傾け、その声を政策に反映させることだ」とおっしゃっていますね。

私は今年六月から九月にかけて百二十カ所以上でミニ集会を開催しました。このミニ集会では皆様から「この点はどうなっているのか」「この問題をきちんと解決するのが政治ではないか」といった忌憚のない意見をお聞きし、その上で私の考えを説明する集会にしました。このような形式で、地元の皆様の「ナマの声」を聞くことが、政治家として大事であることを再認識しました。



原点回帰をし、 安倍

▼今回行われた自民党総裁選挙で麻生太郎総理を支持しましたが、その理由をお聞きます。

私は総裁選告示日の九月十日、地元・下関市で行った記者会見で今回の総裁選において麻生太郎氏を支持することを表明しました。来る総選挙で自民党のリーダーとして先頭に立って戦う総裁を決める選挙であり、誰を支持するのか、私の態度を明確にすべきだと考えたからです。

まず私と麻生総理の政治理念、政治に取り組む基本姿勢が共通していることが麻生総理を支持した最大の理由です。

具体的な政策では、まず日本が歩むべき外交方針が一致しています。私は総理在任中、「主張する外交」を掲げ、自由・民主主義・基本的人権・法の支配という普遍的な価値を共有する国々との交流を深め、その輪を広げるという「価値観外交」を展開しました。麻生総理は安倍内閣時代、外相として共に「主張する外交」「価値観外交」を実践されてきました。

基本的には日米同盟関係をさらに強固なものとし、わが国の平和と安全、さらに国益を確保するということが根本方針です。

北朝鮮による拉致問題に関しても麻生総理と私の考え方は、完全に一致しています。北朝鮮をめぐる情勢は不透明さを増しており、慎重な対応が求められていると思いますが、麻生総理は毅然として拉致問題の解決に全力をあげることでしよう。私もこれまで同様、拉致問題に真正面から取り組む決意に変わりありません。

次に内政課題の焦点である経済政策です。麻生総理は日本経済の現状について「全治三年」という厳しい認識を示しています。私も基本的には日本経済は深刻な局面に陥っていると考えています。先ほどお話ししたミニ集会でも、地方の厳しい状況、苦しい生活実態をお聞きました。

麻生総理は地方活性化に焦点を当てた経済政策の実施を掲げています。私は経済成長を実現しながら格差の問題に取り組むことを基本としていますが、麻生総理の経済政策と変わりはありません。

▼国民が高い関心を示している社会保障政策についてはどうですか。

国民の安心、それが社会保障です。長い年月をかけて医療保険制度、年金制度、介護保険制度、社会福祉制度を整備してきました。いま実施されているサービスの水準は、決して落としてはなりません。

効率化を図るのは当然ですが、同時に財源の確保も必要です。そのためにも、経済成長が不可欠であることは言うまでもありません。安倍内閣時代、新経済成長戦略によって経済成長を達成し、年金財源については三兆円の増収を実現しました。

いずれにせよ、現在の社会保障のレベルを落とさないことが重要であり、また子育て支援もさらなる拡充を目指すべきです。

▼いよいよ総選挙が迫ってきました。決意をお聞きます。

平成五年の総選挙以来、十五年の間に五回の選挙を戦ってきましたが、今回の選挙は私にとって特別な意味を持つ選挙であり、最も厳しい選挙になると覚悟しています。

総理を辞めて様々な批判をいただきました。この来るべき戦いにおいて山口四区の皆様の信頼を得ることができるかどうか。まさに私が政治家として再スタートできるか、がかかっているのです。

平成五年の初陣の初心にかえて、全力で闘い抜く覚悟です。



支援が私の支えです。



原点同様、安倍晋三です。

豊かで、そして
安心して暮らせる街づくりを目指します。

地域の活性化は
ここから始まります。

地方の持続的な成長を
実現させてまいります。

人材を活かした、
地域の自主的な取り組みを支援いたします。



感謝の気持ちを込めて「お元気ですか？」



文化に根差したふるさとのお祭り、笑顔一杯、大好きです。

「お帰りを」笑顔から元気を貰いました。

地域社会の健全性が
個人の幸せ、家族の笑顔を創ります。

地元から再スタート！

皆様から頂いた忌憚無いご意見が、大きな収穫となりました。

会合を重ねるたびに、皆様のご要望が切実に伝わってまいりました。

地元の皆様とのコミュニケーションが私の栄養源です。

困った時、まさかの時、もしもの時はやっぱり安倍晋三です。





みんなの熱い眼差しを感じました。



子供たちの個性豊かな才能を、愛情を持って大事に育んでゆきたい。

教育は国家百年の計、地域ぐるみで取り組むことが肝要です。



ありがとうございます。課題は二つ着実に解決してまいります。



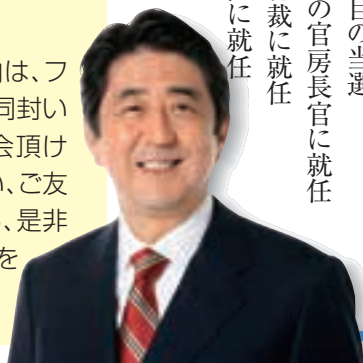
ふるさとの皆様の負託に応え、身を挺して政治家として全うしてまいります。



あべ晋三後援会 入会のごあんない



あべ晋三後援会のご案内は、フロンティア16号と共に1部同封いたしております。まだご入会頂けていないご親戚、お知り合い、ご友人等がいらっしゃいましたら、是非入会下さいますよう、ご勧誘をお願い申し上げます。



安倍晋三プロフィール

1954年(昭和29年)9月21日	安倍晋太郎・洋子夫妻の二男として生まれる
1977年(昭和52年)3月	成蹊大学法学部政治学科卒業
1979年(昭和54年)4月	株式会社神戸製鋼所入社(1982年11月退社)
1982年(昭和57年)11月	外務大臣秘書官
1993年(平成5年)7月	第40回衆院選に山口1区から初当選
1996年(平成8年)10月	第41回衆院選に山口4区から2度目の当選
1999年(平成11年)11月	自由民主党青年局長に就任
2000年(平成12年)6月	自由民主党社会部会部会長に就任
2001年(平成13年)7月	第42回衆院選に3度目の当選
2002年(平成14年)4月	第2次森改造内閣の官房副長官に就任
2003年(平成15年)9月	第2次森改造内閣の官房副長官に就任
2004年(平成16年)11月	小泉改造内閣の官房副長官に就任
2005年(平成17年)9月	自由民主党幹事長に就任
2006年(平成18年)10月	自由民主党幹事長代理に就任
2007年(平成19年)9月	自由民主党改革推進本部長に就任
	第44回衆院選に5度目の当選
	第3次小泉改造内閣の官房長官に就任
	第21代自由民主党総裁に就任
	第90代内閣総理大臣に就任
	内閣総理大臣を退任



昭恵夫人の私の思い

なにかホッとしたことでしょうか。

闘う政治家でいたい

一年という短い期間ではありましたが、総理大臣としていつも日本国、日本国民の将来を考え、精一杯自分の果たすべき課題に取り組んできた姿を近くで見ていて、主人は「闘う政治家」であつたと誇りを持って言えます。

今年五十四歳の誕生日は多くの方に祝福して頂き、再び笑って迎えることができました。これからも健康に気をつけ、正義のために闘い続けてほしいと思います。

変わらぬご理解、ご支援を頂いている多くの皆様に改めて心より感謝申し上げます。



誌名「フロンティア」について

frontier — すっかり日本語化された言葉ですが、本当の意味は案外知らないものです。「アメリカ開拓期における開拓地の最前線」と『新世紀大辞典』にあり、『広辞苑』には「(科学などの)最前線。未開拓の分野」の意もあると書かれています。待望の21世紀は大きく動いています。幸せと平和を願う新たな時代は、新しい世代が一丸となって切り開いていかなければなりません。いわゆるフロンティア・スピリット……。

安倍代議士は、常に「未来は不変なものではなく、我々の努力によって創り出されていくもの」と考えています。私たちがこの会報誌名を「フロンティア」としたのは、その心意気にぴったり合う言葉だと思ったからです。

「フロンティア」は随時発行しますので、未永いご愛読と益々のご支援をお願い致します。

フロンティア16号 2008年(平成20)10月

発行所／あべ晋三後援会